

南の風 429

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

前号の続きになります。

- ・「選手を知る努力をしよう」、「選手（個々）が必要としていることは何なのか？」
 - ・選手の個人目標の見直し → 個人目標の振り返りや気づき、**《現在地》**の確認
※選手の**アブティチュード**（才能、スキル）は、選手個々の現在地を示すものであり、伸びしろは、誰にも分からない。分からないのだから、他人に決めつけられるものではない。「あいつはだめだ」、「無理だ」などとジャッジしないようにする。コーチの一方的な主観、相性、ラベリングなど、様々な要素が存在する。気をつけよう。
 - ・「沈黙は思考ゼロではない」 → 子どもは成長スピードがここで異なり、差が激しい。
- (2) 個別最適化のアプローチ
- ・日本は「恥の文化」 → 「間違えると恥ずかしい」、「自分が発言していいのかという『わきまえ』」
 - ・静かでおとなしい選手を意識的にケア → 「言えないやつがダメなのだ」と突き放したままでは、大事なものを見失う。
 - ・「見る、聴く、受け入れる」 → **《アスリート・センタード・コーチング》**
 - ①主観だけで考える癖をなくす
「この選手はこういう子」と主観でラベリングしない。逐一振り返る。
 - ②自分の考えを一方的に伝達しない
コーチからの一方的な指示・指導に意味はあるのか？選手は聞くだけ？
 - ③答えに正解はない
「そこにパスして」、「そこでシュートしろ」と指示することが正解か？
選手が、「僕らはこうしたい」と答えを追求する流れをつくること。**《主語を選手にする》**

V 対等な立場で

- (1) 選手同士の学び合い
- ・ミニバスでは高学年が低学年に、学んだこと、気づいたことを教えたり、知らせたりする機会を増やす。
 - ・中学生はお互いが、学び合い教え合いをする場面をつくる。
- (2) コーチ間の関係性を対等に
- ・監督という、絶対的なトップの意見がすべてというヒエラルキーをなくす。
 - ・選手に学びの場を提供する際、指導の一貫性を十分考慮する。コーチによって選手の学びの方向性がまちまちでは、選手が困惑する。

Merry Christmas ! 次号にします。